



日口交流

発行: 特定非営利活動法人日口交流協会

E-mail: nichiro@nichiro.org

Home Page: <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14

麻布台マンション401号

Tel: 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752



相撲観戦 2021年1月

千葉 麻里

2021年1月16日(土)、ロシア大使館や通商代表部の方々のリクエストで国技館での相撲観戦を実施した。東京は急激に感染者が増えてチケットの販売が一時中止になり一月場所がなくなるのではと思われたが、無事に開催されることとなった。昨年から岩本常任理事が数回にわたり手配してくれた団体予約が無駄にならずほっとした。

2階席は、団体予約で購入されるチケットのお客さんがほとんどで外国人が多い。席はかなり空いており、ところどころその団体客の集団がみられる程度だった。しばしば、「マスクを着用してください」などと書かれたプラカードを持ったスタッフが回っていたが、せめて英語も併記してあればいいのと思う。

今年はアントニーナさんが希望者をまとめてくれたが、例年にない多人数だった。C席は80名、A席の希望者が8名、それに日本人の会員が2名参加。ロシア語上級クラス担当の中村泰弘常任理事が、力士の写真にキリール文字で四股名を入れた取り組み表を作成して皆さんに配ってくれた。それがとても参考になったようで、大使館の方々も一番一番、照らし合わせたり、写真をスマホで上手に拡大して実物と比較して見たりしていた。

子どもたちは食べ物の販売がなくて寂しそうだったが、それでも、紫のまわしの力士はだれか、など頻りに名前を聞いたりして最後まで観戦。小兵の力士の方が勝つと大喜びだ。

今年に入って大使館付属学校が閉鎖になっており、日本語、生け花、友禅教室もお休み。行事も少なくて楽しみが減っている。また、新たに少数で三密を避けてもできる交流

行事をみんなで考えなければいけないと思った。

(常任理事)



お願い

NPO 日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらでも結構です。

松本一夫氏、内堀學氏、亀田慶一郎氏、山岸ひさ子氏、松村るみ子氏、北澤法隆氏、松本泰男氏にご協力いただきました。ありがとうございます。

振込先: 郵便口座 00160-9-66486、加入者: 日口交流協会
連絡先: 日口交流協会事務局 E-Mail: nichiro@nichiro.org

Tel: 03-5563-0626 Fax: 03-5563-0752

お知らせ

●ロシア語クラス生徒募集中!

水曜 初級2 (17:15~18:15) 初級1A-1 (19:25~20:25)

初級1A-2 (20:30~21:30)

金曜 入門 (18:30~19:30) 初級1B (19:30~20:30)

土曜 上級 (10:00~11:30)

オンラインクラスは初級、中級1、中級2、準中級のグループレッスンが4クラスあります。

*事務所では少人数で実施し、消毒液、パーテーション等用意して十分配慮はしておりますが、受講の皆様はマスクの着用、換気、手洗い等、感染の予防にご協力お願いいたします。(緊急事態宣言の際は原則オンラインとなります。)

対面クラス、オンラインクラスともプライベートレッスンも実施しておりますので、ご希望の方はご相談ください。ベテラン教師陣が皆様をお迎えいたします。

コルド・ナターリア (初~中級)、イローナ・パルフェノワ (中~上級)、タチヤナ・スニトコ (初~上級)、ウラジーミル・ボロビエフ (初~中級)、オクサーナ・ピスクノワ

●テーマ別ロシア語「おもてなしロシア語」6

日時: 2021年1月31日、2月7日、2月21日(日) 13:30~16:00

場所: 田町リーブラ (みなとパーク芝浦) 2階多目的室

会費: 会員7,000円、一般8,000円

講師: オクサーナ・ピスクノワ

●男女平等参画フェスタ INリーブラ2020

日時: 2021年2月21日(日) 27日(土) 28日(日) の3日間

場所: 田町リーブラ (みなとパーク芝浦 2階) 入場無料

*27日のみ学習室Eにてマトリョーシカ教室が参加します。

*エレーナ先生によるマトリョーシカの展示、体験、販売もあります。

●第21回(通算第57回) 通常総会開催

日時: 2021年3月20日(土) 10:30~11:30

場所: 新橋生涯学習センター305

*会員の方への議案書は2月末に発送されます。

*お問い合わせ、お申込みは協会事務局まで。

Tel: 03-5563-0626、E-Mail: nichiro@nichiro.org

池田林儀とロシア①

野口 久美子

96年前、一人の日本人男性がモスクワに降り立った。秋田県出身のジャーナリスト・池田林儀（しげのり）。戦前、ドイツや占領下朝鮮半島のジャーナリズムに邁進し、占領下の京城（現在のソウル）では伊藤博文の創業した新聞社「京城日報」で副社長を務めた。また、瀬戸内寂聴氏が瀬戸内晴美時代に発表した「ここ過ぎて 白秋と3人の妻」（新潮社1984年）では、北原白秋の2番目の妻章子と駆け落ちする新聞記者が登場するが、それはベルリン特派員になる直前の池田である。私の大叔父であり、私がロシアの世界に足を踏み入れた理由のひとつとなった人物。

「ロシアは、人をして、限りなき空想をそゝらしめる國である。その空想が、夢となり、まぼろしとなり、紫の煙となりて、人をして自由へのあこがれをおぼえしめる。その夢の國、自由の國の都モスクワヴァへと、今自分はいそぎつゝある。」

「永遠の貧乏」（文友社1926年）に収められた「白樺の色紙」で池田は、1925年2月、モスクワへ向かうシベリア鉄道での思いをこのように綴った。報知新聞では大隈重信侯の番記者となり大隈邸に住み込み、1920年から5年間ベルリン支局に勤務した池田は、既に立派なナチスドイツの信奉者でもあった。

1925年は日露間の重要な年である。1月20日に日ソ基本条約が締結され、2月25日に批准された。日本側は駐中華民



国特命全権公使芳澤謙吉、ソ連側は駐中華民國大使レフ・カラハンが署名した。芳澤公使は、署名の数日前、昼食の後のスケートで大腿骨を骨折したので、病床でこの記念すべき条約に調印した。調印後、多くの感謝と祝福の電報が届き、骨折を知らぬ人々から「オホネオリヲカンシャイタシマス」の電報に、芳澤の妻は池田にそのレントゲン写真を見せながら、複雑な気持ちであったことを述懐する。

池田が東京を出発したのは2月12日、下関、奉天、満州里からシベリア鉄道でチタに入り、2月21日の昼に曇の降りしきるモスクワに到着する。彼がシベリアを通過したのは1924年7月が最初で、当時は古ぼけた列車に粗末な車内食、人々の疲弊ぶりにうんざりしていた。たった8か月で列車の様子は激変し、人々の様子も食事も変わり、整理整頓され気持ちよく鉄道旅行が可能になったことに驚くのであった。それは、モスクワに到着しても繰り返される驚きで、数か月の間に大きく変貌を遂げる当時のソ連の姿は、現代のロシアにおいても受け継がれている。変化が訪れる時は瞬間にその波に身を委ねられる国こそ、ロシアである。時代を反映し、あれほどドイツに傾倒した池田だったが、この本の中ではロシアにシンプルで深い政治経済的視点に基づいた関心を寄せている。

奇しくも私も大隈侯の早稲田大学を卒業し、ドイツに暮らしたのち、日ロ関係に資する企業を営んでいる。身近な先人の足跡に、現在の日露関係の在り方に思いを馳せざるを得ない。（理事）

～イルクーツク便り（10）～

留学生活7年を迎えて・6

阿部 耕大

皆さんあけましておめでとうございます。イルクーツク国立大学修士課程2年の阿部耕大です。年が明けてもコロナウィルスの感染拡大が収束する気配はイルクーツクでも全くありません。オンライン授業がいつまで続くのか全く不透明ですが、我が大学はモスクワと歩調を合わせる方針のようで現時点では2月1日までだそうです。昨年最後の2か月は振り返る間もなく過ぎ去りました。10月に無事に秋学期の授業を終え、インターンでは6月にロシア語の卒業試験を受ける外国人学生（ほぼ中国人）にチューターとして作文の添削をしていました。大多数の外国人学生は既に帰国した為おそらくZoomでの試験となるでしょう。かく言う私も12月の期末試験は夏に引き続きオンラインでした。せっかくなので自宅待機の期間を有意義にしようとインターンや試験と並行してオンライン授業や講義にも自主的に参加。一つ目はシベリア連邦大学が主催するロシア語授業（文学と言語学）。世界中のあらゆる国から生徒が参加していたのでとても国際的な雰囲気、大学があるクラスノヤルスクを中心にシベリアの文化背景や言語状況が知れて興味深かったです。二つ目はモスクワにあるプーシキン記念大学が主催している月2回のロシア語教授法の公開講座。現役のロシア語教師や自分と同じ専攻の学生達計150人以上が参加する大規模なものでした。未だに外国人の為のロシア語教育法は研究の歴史が浅い学問らしく時代に合わせた授業例などが多く発表されていました。意気

込んであれこれ参加しましたが結果として最後の方は疲れてしまったという情けなさ…。肝心の試験はというとロシア語教授法が専攻なので実際に模擬授業を行ったのですが、担当の先生からは内容・構成は問題ないがロシア語のミスが多いという致命的な指摘を受けまして(笑)結果的に何とか温情で合格をもらいましたがロシア語教師になりたいという目標は消え、今はただ問題なく半年後に大学院を卒業できればそれでいいやという気持ちです。生まれつきの性分（根性無し、飽き性）は別に外国に住んだからって変わりません(笑)冬休みは3週間程と短いものでした。お正月に向けたスーパーでの買い物風景の混雑ぶりは正直去年とあまり変化がなく、感染するかどうかなんてはや誰も気にしてない状況。自分もおそらくコロナのせいで味覚嗅覚が1週間消失したり、知人もコロナによる肺炎で入院していた状況を知ってるだけにどうしても活発に行動する気にはなれず…ってのは半分嘘。実際は12月下旬に気温がマイナス35℃近くまで下がったので単純に寒いから外出たくなっただけ。しかも外ならともかく寮の部屋に絶えず隙間風が吹いてくるせいなのかロシアの強力な暖房をもってしても室内温度が上がらず今も布団に包まれながら原稿書いてます(笑)こうやってメンタルだけは強くなっていくあたりシベリアでの生活は決して無駄ではないのかもしれない(笑)

チェリャービンスク

畔上 明

田舎道を歩いていると「どこへ行きなされるかね」と地元の方から声を掛けられ会話へと発展することはありませんか？ロシアに於いても特に地方都市へと出向いたりすれば、てらいいのない人懐っこさで話しかけられることが往々にあります。

チェリャービンスクといえば、1957年150km北西のオジョールスクにて核兵器工場事故による3万人を越える人々の被曝、2013年隕石落下による多くの負傷者、建物の損壊といった悲惨な記憶があるばかりでしたが、2014年8月20日から2週間に亘る出張滞在をした印象は格別素晴らしいものでした。

チェリャービンスク世界柔道選手権大会 (8/25-31) 参加のため井上康生監督率いる日本選手団、関係者、サポーターたちの現地地上手配を請負った私は、事前に市内の手配先を巡るためにマルシュルートカ (小型乗合バス) を利用したのですが、よそから来た人間と見るや乗車賃の払い方を知らせることから始まり、行き先を聞いて道案内をアドバイスしてくれる周辺の人たちからの親切な声掛けが老若男女から途切れなく優しく浴びせられます。不案内な道を歩いているときには、必ずといってよいほど、何かお助けしましょうか、と分り易い通りへと同行してくれるのです。地方都市ならではの素朴な気さくさが伝わってきます。

南ウラルの中心地であり「シベリアへの玄関口」とも言われるチェリャービンスクは、150km南下すれば中央アジアのカザフスタン国境に達することもあって市の紋章はラクダです。

選手の宿泊ホテル「マルクシュタット」では食事はこちら配りがなされ各階には体重計が置かれています。1.5km西のガガーリン公園内のスポーツ複合センター「ディナモ」が練習場として用意され一晩の内に厚い柔道着を洗濯するサービスまで受けてくれます。

選手のご家族が訪れた時には、ユーモラスな彫刻が立ち並んだ歩行者天国キーロフカ通りをまず案内、その北端に流れるミアス川の美しいパノラマを望みながら歴史博物館へ入り展示品の目玉である隕石をご覧頂く観光ルートをつくり上げました。街全体がこぞって柔道を盛上げ、要所要所に掲げられた看板には日本の柔道選手の写真なども見られます。

最終日には会場にプーチン大統領も現れ、そこで日本男子団体は金メダルを獲得、最終的に海老沼匡、中谷力等の金を始めとして11ものメダルを手にする結果となりました。

街の思い出の一つは、信号のない横断歩道も必ず車が一時停止をするマナーの良さです。かつての日本も一時停止は当たり前であった筈ですが、煽り運転に象徴されるように昨今人々の荒んだ心で交通マナーが薄れていることに鈍感になってきているようです。そんな初歩的なことに気付かせてくれる心地好さを感じます。横断歩道の前にふと立ち止まってしまうと渡る気配を示さなくても、大型の業務車から軽乗用車に至るまでしっかりと停車して人々の動きを気長く待ってくれます。単にモラルが徹底しているというだけではなく、人と人との気遣いが隅々まで表れている一例と言えるでしょう。

(「プロコ・エアサービス」シニア・アドバイザー)



ロシア人入国ビザ

大原 翔

古い話で恐縮ながら、ソ連に入国するときビザは、紙で、パスポートに挟んで当局より発給された。パスポートに張り付けるでも、綴じるのでもなく、別の紙であった。このビザのサイズも、パスポートより一回り大きく、パスポートに収まり切らなかった。一方、ソ連に滞在中は、まさに命の次に大切な書類であり、ビザとパスポートを肌身離さず携帯しておくことが必須であった。長期間滞在する時など、この別紙であるビザを小さく折りたたんでパスポートに挟んで持ち歩いたこともあった。そうすると、折り目のところが破れかかり、心配したものであった。その後、ビザをパスポートに印刷されたものが発給され、そのような懸念には及ばない。

2017年より、日本はじめとするいくつかの国を対象にウラジオストク等のロシア極東地域への査証 (電子ビザ) は、旅行者自らオンラインで取得できるようになった。インターネットで自宅からでも申し込めば、3日程度以内に、電子メールでビザがPDFで送付されてくるという便利なもので、しかも無料であった。ちゃんと送付してくるのか、私自身も最初は心配であったが案外簡単にスピーディに発給されるのに、感動した。初めてのときは、ウラジオストクの入国手続きの際、この電子ビザを見せて、コンピューターにまだ入力されていないと言われ、入国できないと言われたりするのはないかと、心配したこともあったが、まったくの杞憂であった。ちなみにこの電子ビザはA4のサイズである。スーツケースなどにしまい込んで、入国係官に提示する段になり、手元にないのに気が付いても手遅れだろう。いつも忘れず手にもっていよう。

このビザが一層拡大し、日本含む52ヶ国の人に対してロシア全土にどこでも滞在できる電子ビザを発給するとロシア当

局が昨年夏に発表していた。ロシアに行く時、いつもまず最初、ビザの取得を考える必要があった過去を知っている人たちにとっては、このことは、感動のものであった。ビザが自由に取得できれば、ホテルも自由にWEBで自分の希望にあわせて自由に予約することができる。このような時代がくると…この出来事は歴史的な転換であったと言える。

ところが、昨年、世界的に大きな出来事が起こってしまった。ご存知の新型コロナの蔓延。そのため、日ロ間の人的交流も大幅に下がってしまった。航空機の便数も大幅削減された。世界的な人的交流が落ちてきた状況下、ロシアはロシア全土の電子ビザの発給を延期すると発表した。残念である。新型コロナが収束した暁には、都合にあわせて、電子ビザを取得してロシア行の計画を立てようとおもっていたところであった。

コロナ禍が収束するころには、電子ビザではなく、日ロ双方がビザそのものを必要としない時代になっていることを期待するのは、時期尚早か・・・。(↓ロシア外務省のWEB)



電子ビザで極東へようこそ!

2017年8月8日から18ヶ国の国民はウラジオストク自由港における国境検問所を通じてロシア連邦に入国するための電子ビザを取得できます。

速く。 休日及び祝日を問わず、電子ビザは四日以内に発行されます。

モスクワのイルミネーション

西山 美久

年末年始のモスクワでは主要な広場や通りが色鮮やかなイルミネーションで飾られ、幻想的な雰囲気を醸し出している。せっかくなので、市内の観光名所を見て回ることにした。中でもモスクワ観光の定番である赤の広場やグム百貨店は噂どおりとても綺麗で、キラキラ輝くグム百貨店はおとぎ話に出てくるお城のように見え、ひときわ目立っている（写真①上）。



また、赤の広場には野外スケートリンクも設置されており、イルミネーションを見ながらのスケートは格別だろう（写真②左）。隣接するマネージ広場も鮮やかに飾られていたが（写真③右上）、新型コロナ

ウイルスの感染拡大により、今年はファストフードやお土産などを売る屋台が中止になってしまった。例年この時期になると、多くの屋台が出店し家族連れで賑わっている。眺めるだけでも楽しいのだが、今年はお預けとなってしまった。



モスクワでは、2020年7月に路上でのマスク着用義務が撤廃されたためか、通りでマスクを着ける人は非常に少ない。色鮮やかなイルミネーションもあり、コロナ禍であることを忘れさせてくれる。もっとも、市内での新規感染者の増加を受けて、ソビヤーニン市長は23時以降のレストランやカフェ等の営業を禁止にした他、市内の企業に対して従業員の在宅勤務比率を3割以上にすること等を義務付けた。

感染者増加を受け、コロナ関連のニュースが連日取り上げられているが、モスクワの色鮮やかなイルミネーションがコロナを忘れさせてくれるかもしれない。（北海道大学）

函館の旧教徒再考

倉田 有佳

新年早々、「函館の歴史を学ぼう会」の招きで「20世紀前半の函館のロシアパンと旧教徒」をテーマにお話しさせていただいた。聴き手は、函館市内や近郊の市町に暮らす70代以上の方々だ。地元の歴史を学び、孫に話して聞かせることも楽しみの一つだそう。

旧教徒（古儀式派、分離派とも）は、17世紀半ば、ロシア正教会の総主教ニコンの宗教儀礼改革を受け入れなかった人たちだ。中村喜和氏（一橋大学名誉教授）は、旧教徒が函館を選んだ理由として、彼らにとって守るべき厳格な信仰生活上必要とされた清い水や広い土地があったこと、函館から露領漁業に出かける日本人とロシア極東の旧教徒間の接点を挙げている。

筆者はこれに加え、カムチャツカの旧教徒とのネットワークにも着目すべきと考える。「荒涼たる僻遠の地」カムチャツカへの移住に旧教徒が「最適有望」と考えたのは、ブリアムール総督グロデコヴォだった。本格的な移住は、1909年にカムチャツカ州が沿海州から独立した後に始まる。1911年6月、ウラジオストクからカムチャツカ視察に向かった在ニコラエフスク領事鈴木陽之助は、カムチャツカに移住する旧教徒（「モロカーネ」28家族154名と「スタロオブリャトツイ」9家族30人）が同乗していたことを復命書に記している。

函館に旧教徒が現れるのは1910年頃だが、その数年後にはカムチャツカの漁場に行き（出稼ぎ）、中には同地で冬を越す人たちもいた。日本人漁業者は通常越年しないため、同地の旧教徒の世話になったのであろう。

しかし、ロシア革命の影響でカムチャツカの漁場に行けなくなる。現金収入の途が断たれ、旧教徒たちは試行錯誤する

が、結局のところ、「ロシアパン」（甘いパンや黒パン）の製造販売が主な生計手段となっていく。

旧教徒に強い興味関心を寄せたのは、地元の新聞記者たちだった。通訳を伴い山中まで何度も通う記者もいれば、旧教徒が写真を忌避することを承知の上で、盗み撮りする輩もいた（写真）。

一言で旧教徒と言っても来函の時期や経緯は様々で、住んでいた場所も、銭亀沢村の山中の沢沿いから海岸沿い、トラピスチヌ修道院近く、町場近くの湯川と、数カ所に点在していた。1920年以降は、革命派からの弾圧を逃れ、ニコラエフスクやカムチャツカから一家で避難してきた旧教徒が加わった。

一時は60～70名ほどの旧教徒が銭亀沢村や湯川村（現



『北海タイムス』1924年10月1日

函館市）に暮らしていたとされるが、1925年を境に物価高、土地の狭さ、ベリー類の少なさなどを理由に樺太、あるいは本州へと去っていった。

だが日本（内地）で旧教徒が集落を形成したのは函館だけだ。函館生まれの長谷川濬（シュン）（パイコフ『偉大なる王（ワン）』の訳者）は、銭亀沢村団助沢でロシア語を覚えた。旧教徒が銭亀沢の漁港に黒パンを売りに来たこと、子ども同士で遊んだこと。孫に伝えてほしい地元史の一コマである。（ロシア極東連邦総合大学函館校教授）